

東京薬科大学模擬患者研究会 10年の歩み

別生伸太郎¹，井上みち子²，濱田真向¹，増田多加子¹，杉浦宗敏^{1,3}

1. はじめに

2006年から開始された6年制薬学教育は、5ヶ月に及ぶ実務実習の導入を大きな柱とし、様々な教育改革が実施されてきた。その一環として、実務実習前の4年次生を対象に臨床現場で学習するに相応しい基本的な知識・技能・態度が習得できているかを測定する「共用試験」が実施されるようになり、2018年度の実施で10回の節目を迎えた。共用試験のうち、技能・態度を評価するOSCE（Objective Structured Clinical Examination；客観的臨床能力試験）では学生のコミュニケーション能力を適切に評価するため、非教員で構成される模擬患者（SP）が欠かせない存在となっている。東京薬科大学ではこの様な貴重な人材を継続的に一定数維持し、単にOSCE実施のためだけでなく学生の医療人教育にも活用できるよう、一般市民からボランティアを募り独自にSPを養成している。こちらも昨年、養成開始から10年を迎えることになった。そこで、本稿では東京薬科大学におけるSP養成の歴史と現状を振り返り、今後のSP養成における課題について考察する。

2. 日本におけるSP活動と東京薬科大学模擬患者研究会（SP研究会）誕生の経緯

我が国の模擬患者導入は、1964年に世界で初めてSPの利用について報告したH. S. Barrowsが、1975年に来日し講演したことが始まりであるとされている^{1),2)}。しかし、このように非常に早い時期に本邦へSPという概念が紹介されたにもかかわらず、模擬患者の利用は一部の教員がデモンストレーション的に利用するに留まり、長らく普及してこなかった³⁾。しかし、医療が高度化・複雑化するに伴い、医療者間のコミュニケーション不足による医療過誤などが報道されるようになると、コミュニケーション能力の育成が医学教育の分野で重要な教育課題の一つとなり、実際の臨床体験に代わるものとしてSPを活用した教育が行われるようになった。特に1994年に川崎医科大学総合診療部でOSCEを用いた臨床能力評価が開始され、1996年以降医学教育学会による基本的臨床技能教育ワークショップが毎年開催されるようになったことが、SP活用拡大のきっかけとなった³⁾。そして、2001年より医学部・歯学部でOSCEトライアルが開始され、2005年12月の正式実施に牽引される形で、全国的にすべての医学部・歯学部でSPを活用した教育が広まった。

薬学部においては医学部に遅れること4年、6年制教育導入に伴い実施されるようになった実務実習事前学習ならびにOSCEの導入を契機に、全国薬学部にSPを活用した教育が広く普及することになった。東京薬科大学薬学部でも2009年9月からの4年次実務実習事前実習と、同12月のOSCE実施が決定したことを受けて、2007年7月にSP委員会が発足し、同8月に八王子・南多摩・北多摩薬剤師会から計10名の先生を外部有識者として迎え、SP育成推進委員会が新設された。実務実習事前実習遂行には学生10名あたりSP1名が必要であると試算されたため、発足当時の最優

¹薬学部薬学実務実習教育センター ²東京薬科大学模擬患者研究会 ³薬学部医薬品安全管理学教室

表1 東京薬科大学 SP 研究会の沿革

年	月	実施内容	年	月	実施内容
2007	7~8	SP育成推進委員会設立のための準備委員会開催	2013	4	平成24年度 東京薬科大学スピリッツ賞受賞 受賞理由：「本学の実務実習教育の学生教育に対する多大な貢献」
	8	SP育成推進委員会設立 ○学内メンバー 10名 ・薬学部長・薬学実務実習教育センター正副センター長 計3名 ・SP委員会委員 7名 ○学外メンバー 10名 ・八王子薬剤師会6名 ・南多摩薬剤師会1名 ・北多摩薬剤師会3名 ○オブザーバー 1名		5~7	実務実習事前実習へ参加
	10	SP育成推進委員主催 教員向けSP講習会開催 (於：ファルマ八王子) 講師：佐伯晴子先生(東京SP研究会)	5~10	第7期 SP基礎講習会開催	
	12	日本薬学会主催OSCEトライアル	10	第5回 SP交流会開催	
2008	2	大学同窓会誌「とうやく」および卒業後教育講座でSP募集	12	OSCE直前実習へ参加 第5回 OSCE実施(本学SP研究会会員60名)	
	3	日野市・八王子市・多摩市の地域住民約2000世帯を対象とした薬局に対する意識調査およびSP募集の広報活動	2014	1	岐阜大学MEDC主催 第51回 医学教育セミナーとワークショップにSP研究会会員10名を派遣(於：東京医科歯科大学)
	7	第1回 地域市民向け説明会開催(於：東京薬科大学内旧模擬薬局) 八王子・多摩地区保険薬局でのSP募集パンフレット配布		2	SP育成推進委員会セミナー開催 講師：藤崎和彦先生(岐阜大学)「薬科大学での医療人教育の現状と将来」
	11	SP養成開始(目標数：SP 1名/学生10名) 第1期 基礎講習会開催(～2009年3月)	3	岩手県病院薬剤師会研修会にて活動報告	
12	OSCE学内トライアル実施(3年生対象)	5~7	実務実習事前実習へ参加		
2009	3	SP研究会講習会開催 講師：阿部恵子先生(岐阜大学)「SPによるフィードバックのための講習会」 セミナー開催 SP育成推進委員会・学生支援GPプロジェクト共催 講師：藤崎和彦先生(岐阜大学)「薬科大学における医療人教育とは」 日野市地域住民交流会で募集活動(於：平山台健康・市民支援センター)	9~12	人間と薬学Ⅱ「やまいの語り」へ参加開始	
	4~7	第2期 基礎講習会開催	12	OSCE直前実習へ参加 第6回 OSCE実施(本学SP研究会会員60名)	
	8	第1期・第2期 SP基礎講習会合同修了式開催	2015	1	第6回 SP交流会開催 岐阜大学MEDC主催 第55回 医学教育セミナーとワークショップにSP研究会会員3名を派遣(於：岐阜大学サテライトキャンパス)
	9	東京薬科大学SP研究会発足(登録会員59名) 実務実習事前実習開始 第19回日本医療薬学会(長崎)にて活動発表 ライフプランニングセンター(LPC)所属模擬患者会との合同研修		1~5	第8期 SP基礎講習会開催
10~11	OSCE直前実習へ参加 第1回 OSCE実施(本学SP研究会会員39名+LPC所属SP 21名)	5~7	実務実習事前実習へ参加		
2010	3	日本薬学会130年会(岡山)にて活動発表	9~12	人間と薬学Ⅱ「やまいの語り」へ参加 ゼミナール「薬剤師の専門性と医療職多職種協働について(多職種連携教育)」実施開始 女子中高生の理系進路選択支援プログラム開催	
	5~7	実務実習事前実習へ参加 第3期 SP基礎講習会開催	12	OSCE直前実習へ参加 第7回 OSCE実施(本学SP研究会会員60名)	
	9	第2回 SP交流会開催	2016	1	第7回 SP交流会開催
	9~翌年2	第4期 SP基礎講習会開催 第54回日本薬学会関東支部大会にて活動発表 OSCE直前実習へ参加 第2回 OSCE実施(本学SP研究会会員60名) 第4回全国模擬患者学研究大会にて活動発表		5~6	第9期 SP基礎講習会開催
2011	5~7	実務実習事前実習へ参加	5~7	実務実習事前実習へ参加	
	6~8	第5期 SP基礎講習会開催	9~12	人間と薬学Ⅱ「やまいの語り」へ参加 ゼミナール「多職種連携教育」へ参加 女子中高生の理系進路選択支援プログラム開催	
	9	第3回 SP交流会開催	10	OSCE直前実習へ参加 第8回 OSCE実施(本学SP研究会会員60名)	
	12	OSCE直前実習へ参加 第3回 OSCE実施(本学SP研究会会員60名)	2017	2	第8回 SP交流会開催
2012	5~7	実務実習事前実習へ参加		5~7	実務実習事前実習へ参加
	8~11	第6期 SP基礎講習会開催	9~12	人間と薬学Ⅱ「やまいの語り」へ参加 ゼミナール「多職種連携教育」へ参加 女子中高生の理系進路選択支援プログラム開催	
	10	第4回 SP交流会開催	10~11	第10期 SP基礎講習会開催	
	12	OSCE直前実習へ参加 第4回 OSCE実施(本学SP研究会会員60名)	12	OSCE直前実習へ参加 第9回 OSCE実施(本学SP研究会会員44名+外部協力者11名)	
2013	5~7	実務実習事前実習へ参加	2018	2	第9回 SP交流会開催
	8~11	第6期 SP基礎講習会開催		5~7	実務実習事前実習へ参加
	10	第4回 SP交流会開催	8	岐阜大学MEDC主催 第69回 医学教育セミナーとワークショップにSP研究会会員5名を派遣(於：信州大学医学部附属病院)	
	12	OSCE直前実習へ参加 第4回 OSCE実施(本学SP研究会会員60名)	10	ゼミナール「多職種連携教育」へ参加	
2014	5~7	実務実習事前実習へ参加	10~11	第11期 SP基礎講習会開催	
	8~11	第6期 SP基礎講習会開催	12	OSCE直前実習へ参加 第10回 OSCE実施(本学SP研究会会員49名)	
2015	5~7	実務実習事前実習へ参加	2019	1	岐阜大学MEDC主催 第71回 医学教育セミナーとワークショップにSP研究会会員3名を派遣(於：岐阜大学サテライトキャンパス)
	9~12	人間と薬学Ⅱ「やまいの語り」へ参加			

先課題は、学生数の多い本学で「どのように多数のSPを募集するか」であった。SPの募集は、1年の準備期間をかけて行われた。まず、同窓生の理解と協力を得るために同窓会誌「とうやく」に

学長名で募集記事を掲載するとともに、多摩市・八王子市の調剤薬局窓口に SP 募集のパンフレット配置を依頼した。さらに、日野市・八王子市・多摩市の約 2000 世帯を対象に募集チラシのポスティングを行ったり、平山台健康・市民支援センター（旧平山台小学校）で開催された地域交流会で説明用ブースを開設するなどのプロモーション活動を実施した。上述の広報活動を通して応募を受けた SP 参加希望者に対して、2008 年 11 月～2009 年 7 月に第 1 期・第 2 期の SP 基礎講習会を開催し、2009 年 9 月 1 日に研究会規約を制定してボランティア組織である「東京薬科大学模擬患者研究会」が発足した。当初会員数は 59 名であったが、一時は 110 名を超えるまで会員数が増え、2019 年 1 月現在 78 名の会員が在籍している。

3. SP の役割と活動について

SP には、Standardized Patient（標準模擬患者）と Simulated Patient（模擬患者）の 2 つが存在する。Standardized Patient は、OSCE など試験に参加する SP を指し、ある技能や態度を評価するために標準化された患者役であることを求められる。一方 Simulated Patient は、シナリオに基づいて患者役を演じるが、症状について話をするだけでなく実際の患者と同じように不安を訴えたり、学習者の問いや態度によって対応に変化を付けるなど自由度の高い演技が求められる。本研究会は、後者の Simulated Patient 育成を目指して活動している。様々な教育の場面で、SP は基本的に実習担当教員が作成した薬剤師と患者との面談場面を想定したシナリオにしたがい患者役を演じる。シナリオは SP が患者役を演じる上で元になるものであり、様々な場面での患者を想定し、その患者の名前、年齢、性別、職業、家族構成、性格などの患者背景、主訴、現病歴、既往歴などの症状に関する状況を詳しく設定し、さらに教育的ねらいを加えて作成する。シナリオに基づき SP 研究会のメンバーはメンバー同士ロールプレイを行い、演技内容について相互評価、討論を積み重ねる。実習担当教員および SP 養成担当教員は、SP の演技練習会に参加し、教育者としての教育目標などについて助言をするとともに、ファシリテーターとして演技練習会の運営ならびに教育者側から演技のあり方について検討し、トレーニングを行っている。また、SP は単に患者役を演じ医療コミュニケーション育成のための教育資源となるだけでなく、学生がきちんと対応したか、話をしっかり聴いたか、話を正しく理解したか、説明は分かりやすかったか、不安の訴えに対して共感してもらえたかなどを、患者として感じたことを学生に「フィードバック」し学習者に気づきを与えることも、教育上重要な目的の一つとされている。そこで本研究会では SP を演じる上で必要なシナリオの勉強や演技の練習に留まらず、演技の練習会ではフィードバックのポイントについても討論を行っている。また、フィードバック技術の向上を目的として、定期的に医療コミュニケーションの専門家を招き講演会を開催したり、外部の SP 研究会との交流会や勉強会に本学 SP を派遣するなどし、本学学生に対し効果的な学習が提供出来るよう、SP としての研鑽にも努めている。

4. 東京薬科大学での SP 活用例

本学では様々な場面で SP を活用した教育が実践されている。2017 年度と 2018 年度の活動実績を表 2 に示すとともに、その一部を以下に紹介する。

4-1 実務実習事前実習（薬学部 4 年生対象）

薬学 6 年制導入に伴い、2009 年より実施されている。5 年次の病院・薬局実務実習に先立って、薬剤師職務に必要な基本的知識、技能、態度を学内で修得することを目的としている。この実習の中で、SP は病院を場面とした「初回面談」と「服薬指導」、薬局を場面とした「患者応対」と「薬剤交付」ならびに「一般用医薬品の情報提供」を想定した各場面で活用され、学習者のコミュニケーション能力向上に寄与している。また本学ではモデル・コアカリキュラムの改定に先駆け、2014 年より「在宅医療」を場面とした総合学習を実施しており、東京薬科大学では実務実習事前実習の中で学生 1 人あたり最低でも 6 回は SP を通したコミュニケーション学習が経験できるような体制を取っている。当該実習で、SP は実習担当教員が掲げる教育目標にしたがい、今までに「労作性狭心症」「2 型糖尿病」「心原性脳梗塞」「慢性心不全」「高血圧症」「気管支喘息」「腰痛症」「かぜ症候群」の各疾患に対する患者を演じてきた。

4-2 多職種連携教育（薬学部 2 年生対象）

厚生労働省は国民に更に高度な医療を提供するため、薬剤師に十分な知識と技量のほか、チーム医療を推進するための他医療職種に対する理解と職種間のコミュニケーション能力を求めている。これら能力は、卒業後に臨床の場で培われるのが通例であった。しかし、薬学教育 6 年制の導入により、実践力を持つ薬剤師の輩出が薬科大学の教育命題となり、薬学部はもとより医療教育に関わるすべての大学において、組織化された多職種連携教育の実施が緊急の教育課題となっている。このような社会情勢を受け、医療系他学部を有しない本学は姉妹校である東京医科大学と連携し、2015 年より薬学生/医学生/看護学生合同の多職種連携教育を実施している。本学では SP に気管支ぜん息患者とその家族役を演じて頂き、学習者が各医療職種の視点からチームとして専門性を活かした模擬退院時指導を行うといった取り組みがなされている。

4-3 人間と薬学Ⅱ（薬学部 1 年生対象）

人間と薬学Ⅱでは、「人間・病者を理解し、信頼される薬剤師になるための基本的態度と人間への共感的態度を学ぶこと」を目的としている⁴⁾。当該授業の一部として実施されていた「やまいの語り」に、当研究会から SP を派遣した。この授業では SP 本来の目的である患者を「演じる」という役割から離れ、SP が自らの闘病談を受講生に語り、受講した学生は SP の闘病談を元とした SGD を通して、医療人としての受容的・共感的な態度を身につけることを目的として実施された。

表 2 直近 2 年間の東京薬科大学 SP 研究会活動実績

実施項目	参加延べ人数（人）	
	2017年度	2018年度
総会	43	42
実務実習事前実習シナリオ勉強会	222	195
実務実習事前実習	521	413
人間と薬学Ⅱ（やまいの語り）	12	非実施
多職種連携教育シナリオ勉強会	33	44
多職種連携教育	69	58
女子中高生の理系進路支援プログラム	5	非実施
新人SP養成講習会	50	20
実務実習事前学習Ⅱシナリオ勉強会	98	104
実務実習事前学習Ⅱ	147	180
OSCEシナリオ勉強会	103	55
OSCE	44	49
交流会	34	44
合計	1381	1204

4-4 女子中高生の理系進路選択支援プログラム（学外女子中高生対象）

東京女子医科大学女性医療人キャリア形成センターが中心となり、科学技術振興機構の支援を受けて実施された本プログラムは、女子中高生の興味・関心を高めて理系分野への進学を促すことを目的としている。2015年より本学も本事業に協力し、プログラムの一環として薬剤師の職能体験を提供している。2017年度の実施実績は女子中高生11名、保護者5名であった。SPは花粉症患者を演じ、女子中高生が模擬調剤した抗ヒスタミン薬の服薬指導を受けるとともに、患者として理系志望学生に望むことなどをフィードバックし、理系分野への進学を促す一助となった。

4-5 実務実習事前学習Ⅱ（薬学部4年生対象）

5年次の病院実務実習・薬局実務実習に先立って、前期に行った実務実習事前実習の効果を高めるために、修得した知識と技能・態度を駆使して患者・来局者応対から処方監査、薬剤調製、調剤薬鑑査、薬剤交付と情報の提供、服薬指導管理までの調剤全般を円滑に遂行できる能力と態度を身につけることを目的としている。このような教育目標の中、SPは薬局や病棟、在宅での各場面における患者役を演じている。SPにとって当該学習は毎年12月に実施されるOSCEに向けて、Simulated PatientからStandardized Patientへ思考と行動を切り替える、極めて重要な期間となっている。

5. 東京薬科大学 SP 研究会の課題

養成開始から10年を迎えた東京薬科大学SP研究会は、現在会員数78名を有している。年間のSP総出勤数は、のべ人数にして毎年1000人を超えている（表2）が、これは単純計算でSP1人あたりの活動回数として年間12回を超えていることになる。実際は78名の在籍者が均等にSPの任を希望するわけではないので、多い人では年間活動回数40回を超えている方もいる。これは1回あたりの授業に従事する時間が平均2.5時間なので、多い方で年間100時間程度の活動を行っている計算になる。2019年1月時点での本学SP研究会在籍者の平均年齢は69.3歳で、新規SPを毎年養成しているものの、年々高齢化が進んでいる（図1）。近年、所属会員の高齢化に伴う身体能力の低下や家庭の事情など社会的な問題から生じる教育参加率の低下が課題となっている。本学で継続したコミュニケーション教育・ヒューマニズム教育を実施していくためには常に一定数活動可能なSPを養成しておく必要があり、恒常的なSP募集活動が欠かせない。SP研究会には現在20名の本学卒業生が所属しており、統計上他のSPより有意に在籍年数が長いことが明らかとなっている（図2）。これは単に本学卒業生が母校愛に溢れている結果というだけではなく、SP研究会設立当初に入会下さった在籍年数の長いSPは、同窓会誌を介してSPに応募したという経緯の表れであると考えられる。この結果か

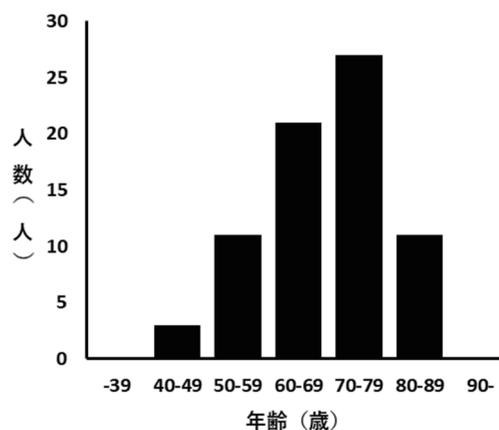


図1 SP研究会会員の年齢構成

ら言えることは、本学卒業生は長期間 SP として活躍くださる可能性があり、その広報手段として同窓会誌が有効であったという事実である。今後改めてこのような媒体を活用して SP の広報活動を実施すると共に、SP の平均年齢を下げるという観点から考えると、大学ホームページでの募集やソーシャルメディアなど新しい媒体を活用した募集を行ったり、卒業式や父母懇談会などご父兄が集まる機会に SP の広報活動を行うなど、今までとは異なる形で広い年齢層に対し募集活動を行うことも視野に入れて会の運営を行っていく必要があると考えられた。

人工知能 (AI) の発達により、我が国では労働人口の約 49% が 10~20 年後に AI に代替可能であるとの推計結果が発表されている⁵⁾。幸いと言うべきか、薬剤師の仕事が AI に代替される可能性は 1.2% と推計されており、将来も存続する可能性のある職種に分類されているが、この推計結果は欧米の薬剤師を対象としたものである⁶⁾。本邦の薬剤師業務は欧米に比較し、服薬指導などの対人業務だけでなく、調剤を始めとする対物業務が多いのが特徴である。先の推計結果の中で、代替可能な職種の共通点はどれも定型的な業務であった。このことから、これからの薬剤師は「モノ」を対象とした仕事を、今まで以上に「ヒト」を対象とした仕事に転換する必要性に迫られていると読み解くこともできる。したがって、対人スキルと医療人マインドを醸成する SP 参加型の教育は、今まで以上にその重要性が増してくることが予測される。今後とも SP の養成は、本学の医療人教育に無くてはならない存在であると結論づけることが出来る。

参考文献

- 1) Barrows HS, Abrahamson S : The programmed Patient ; A Technique for Appraising Student Performance in Clinical Neurology. *J of Med Edu* 1964, 39 : 802-805
- 2) Barrows HS : Simulated Patients (Programmed Patient) ; The development and Use of a New Technique in Medical Education. Thomas CC, Springfield, Illinois, 1971
- 3) 藤崎和彦 : SP 養成. 日本医学教育学会編, 医学教育白書 2010 年版, 52-54, 2010
- 4) 東京薬科大学 2017 年度薬学部シラバス,
- 5) 野村総合研究所 : 日本の労働人口の 49% が人工知能やロボット等で代替可能に,野村総合研究所ニュースリリース, 2015 年 12 月 2 日
- 6) Carl Benedikt Frey and Michael A. Osborne : The future of employment: How susceptible are jobs to computerisation?, *Technol. Forecast. Soc. Change* 2017, 114, 254-280

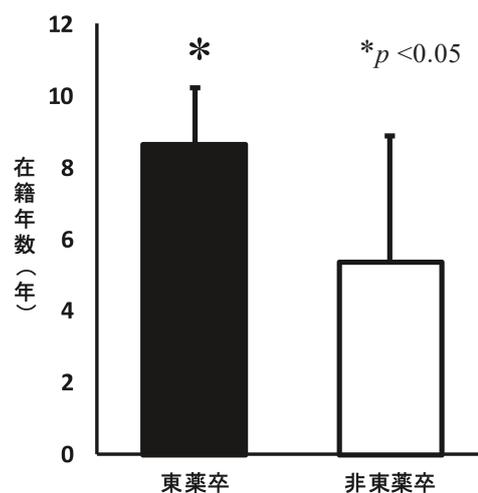


図 2 SP 研究会員の平均在籍年数